

口腔衛生の向上にとりくむ



能美歯科 能美昭夫先生

BGMの流れる治療室

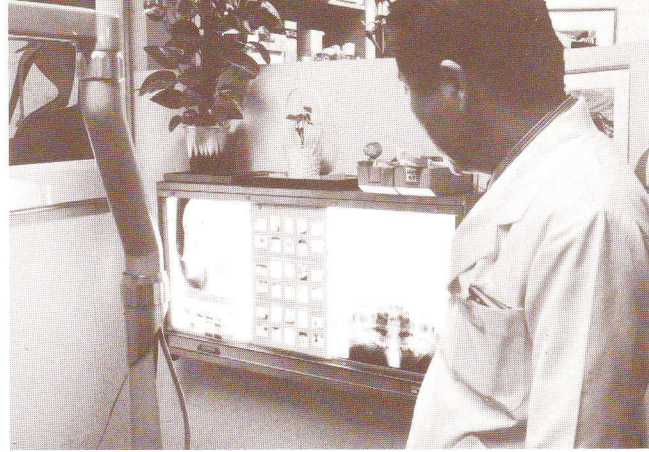
「戦後30有余年経過し、わが国は驚異的な経済発展をなしとげたといわれますが、連日の報道で見る不祥事の数々。商業主義が優先し、倫理観、使命感が薄れ、欲望のみが肥大化し……このような時代にごそ、モノとカネに関係なく、豊かな心、教養をめざすものがあったもよいのではないかと模索した結果、コンサートを開催することになりました……」こんな趣旨の飛翔コンサートが、昨年12月12日大阪毎日国際サロンに於て400名の聴衆で開催されました。主催者は、大阪で開業される歯科医、能美昭夫先生。このコンサートは、新進の演奏家に発表の機会を提供し、一般の人には無料で生演奏に接する機会をと、能美先生が、自力、自費で開催したもので、演奏会当日は盲聾学校の生徒も招待されていました。しかし当日、先生自身は一切表に出ず、陰の役に徹しておられました。

歯科医と音楽会、すぐにはイメージが結びつきにくい組み合わせでしたが、能美歯科医院を訪ねて、なるほどどうなづけるものがありました。ドアを開けたとたん、院内全体に流れる静かな美しいメロディー。待合室も治療室もメロディーにひたりきったように落ついた雰囲気です。「患者さんも、治療している自分も、心がやすまるように」ご自分でレコードから録音し構成したBGMを流しているとのことでした。

口腔への無関心を嘆く

能美先生は、昭和32年に大阪大学歯学部を卒業、その後16年間、同大学に勤め、48年に大阪駅前前のビジネス街、桜橋で歯科医院を開業されました。

同医院のある付近は、大介業も多いビジネス街。「開業してまず感じたのは口腔衛生の悪さ。内科へ診てもらいに行くのに汚れた下着のままでは行かないはず。なのに歯の治療をしてもらいにくるのに口をすすいでさえ来ない、口腔衛生に神経を使わない人が多すぎる」と嘆かれます。同医院は紹介患者が多く、エリートビジネスマンも多いようですが、これらの人も含めて全般的に歯に対する知識も関心も少なく、衛生状態はまだまだ、とか。



それで、患者には口腔内清掃を力説し、ブラッシングを一生懸命指導されます。

「口の中を16ブロックに分け、1ブロックを20秒くらいかけてブラッシングすると、全体で5分20秒かかる。せめてこのくらいブラッシングするとよい。3分では少なすぎます。ハブラシは1週間に1本使うくらいが適当。ところが、今、日本人の平均では1本を3～4ヵ月使っています。現在の12倍くらい使わないとワソ。それも歯の状態に合わせて2～3種類のハブラシを使いわけなくちゃ…。子どもの入浴には親も一緒に入って洗ってやるのに、歯をみがいてやらないのはおかしい。だから3才児で85%もムシ歯になるのは当然…」と、外国のデータなどもまじえながら、日本人の口腔衛生習慣の劣悪さを熱っぽく指摘されます。

医者はアシスタント

衛生教育には、レントゲン写真やスライドなどを使って熱心に指導されますが「よく理解して、ブランクコントロールを実行してくれる人もいますが、なかなか実行しない人もいます」ということで、おとなの教育はなかなかむつかしそうです。「いまだに痛いことが病気で、痛くなければ病気でないと思っている人が多く、定期検診の必要を説き、リコールのハガキも出しているのですがね。歯科医はアシスタントで口腔の健康を守るのは患者自身なのに」といつつも、あの手この手と、熱心に患者教育をつづけておられる能美先生です。

この能美先生、先述のコンサートでもみるように、音楽をご自身が愛好するにとどめず、高度な音楽でもって、好ましからざる世の風潮へ、さわやかな反抗を試するというあたり、非常に純粹な思想、心の持主とお見受けしました。このコンサートは予想外の出費となったようですが、今後もつづけるとはりきっておられます。無償の行為、犠牲もかえりみず、信じるところに行く先生、世間の人たちの口腔衛生思想の向上の日まで、指導に治療に情熱的にとりくんでいかれることでしょう。